



雷龍の恵み

西水美恵子

(前世界銀行副総裁)

世界銀行の現場での思い出を本(「国をつくるという仕事」英治出版)にして、いろいろ思いがけない読者からいたたく反応に驚いている。

その筆頭がグルメな読者。離村ホームステイの体験に関する章で、プータンの家庭料理を少し紹介したからだ。滞在したベムジ村は、あの国では離村の内には入らない。それでもプータンの中部まで車で丸一日旅し、二日目は、峡谷を二つ越える険しい山路を標高約三千メートルまで登った。日没前やっとたどり着いた村には、越冬支度を整えた喜びの時間が流れていた。千枚田を渡る秋風に、山椒の薫りを聞いた。

古代米の赤米を作る農民の衣食住は自給自足に近いとはいえ予想を遥かにこえて豊かだった。民家は農家と呼ぶには大きすぎて、英国の片田舎によく見かける小荘園主の邸の風情。家畜用の一階は、分厚い土壁の白い漆喰が眩しい。住居にあてられる二階と客室や仏壇のある三階は、釘一本使わない木組み様式。屋内はもちろん、外の壁や窓枠にも、色とりどりの八宝吉兆紋が躍っていた。

洗顔は井戸端ですますが、バケツの水で流す水洗式の室内便所には驚いた。贅沢な露天風呂も楽しめる。真っ赤に焼いた岩石をヒマラヤ杉の風呂桶に投げ込む。ジュウツと大きな音をたて蒸気が飛ぶ。鉱物成分が溶け出た頃を見計らってネズの実と葉を浮かべると、諸々の病に効くと教わった。

野良仕事にさえ手織りの民族衣装を纏う村人のこと、見事な正装姿には目を見張った。が、仰天したのは、食生活だった。

にしみず・みえこ ソフィアバンク・シニアパートナー。
プリンストン大学助教授（経済学）を経て 1980 年に世界
銀行入行。97 年南アジア地域担当副総裁に就任。03 年退職。
著書に『貧困に立ち向かう仕事』『国をつくる仕事』、その他
www.sophiabank.co.jp を参照。

懐かしい山椒の佃煮。ヤク（犂牛^{はらうぎゅう}）のチーズと唐辛子を絡め、生姜バターで炒めた茸。ほんのりと不思議な苦みが残る蘭の蕾のおひたし。そして、川藻の香りが清々しいおすまし。赤米のご飯を片手でにぎり、おかずを添えて、にぎり寿司の要領で口にほうりこむ。

野良仕事で疲れた時は、蘭や寄生木の葉を茹でてヤクのバターをたっぷり溶かし、岩塩で味つけたバター茶で生き返る。自家製の焼酎や濁酒も美味しい。夕食後の憩いの時には、アパ（お父さん）が「精力がつかから要注意」と笑いながら、卵酒を振舞ってくれた。

思い出しただけで頬が落ちるけれど、忘れられないのは、そばがき。私の大好物が蕎麦だと知ったアマ（お母さん）が、心を込めて作ってくれた。蕎麦は峠をひとつ越えた高原で栽培される。米の不作に備えるのが目的だから、殆どは焼酎と家畜の餌になる。純粹な自然栽培の蕎麦の実は、宝石のように光っていた。アマが、石臼でゆっくり挽いてくれた蕎麦粉は、しつとりとして香り高かった。山頂の泉から落とす甘露を沸かして混ぜ、熱々を手早く丸めてくぼみをつける。そこに溶かした唐辛子バターに、一口ずつ、ちぎったそばがきを浸けて食べる。デンゴと呼ぶブータン流そばがき。もっちりした食感が、見事だった。

「デンゴを小さめにして川藻のおすましに浮かべ、山椒の粉をほんの少しふりかけたら日本料理になる」とアマに言ったら、早速試作してくれた。その豊かな風味にアマはただ涙。アパは「この世のものとは思えない」と喜び、ブータン本来の国名ドウルック・ユル（雷龍の国）にちなんで「雷龍の恵み」と命名した。後日、和流そばがき「雷龍の恵み」は、蕎麦と川藻のおすましがお好きな国王陛下、雷龍王四世に、献上されたと聞く。

古来、民が薬と尊重してきた苦蕎麦も、甘蕎麦と同じく世界一の風味を誇ると思う。その蕎麦で「故郷の村起こしと国づくりを」と夢みる友が、あの国にいる。彼の夢と「雷龍の恵み」を同胞にもと願う私の夢が、重なった。幸い、顧客に安心と感動をもたらす食材を追求し続けるオイシックスの高島社長が、奔走してくださっている。「雷龍の恵み」が両国の絆を深め、奥深い豊かさを恵んでくれる日の到来を、祈ってやまない。